

国際金融パネル「金融業多国籍化の新段階」(開催の趣旨)

座長 九州大学 岩田 健治

いわゆる「金融グローバル化」は、証券投資を軸とする主要先進諸国間および先進国-途上国間の資本移動の急増に尽きるものではない。各国における金融サービス業の対外開放により、とりわけ90年代半以降、金融業自体のグローバル展開が大きく進んでいることも、金融グローバル化の重要な側面であると考えることができる。

とはいえ、こうした金融業の多国籍化自体は、90年代以降のグローバル化時代に限ったことではない。戦後の金融業多国籍化を振り返るならば、(1)60年代以降のユーロ市場の発展に伴う国際金融中心地(マネーセンター)での「多国籍ホールセール銀行業」(Grubel。以下同様)、(2)多国籍化した企業顧客に現地で金融サービスを提供する「多国籍サービス銀行業」(同上)という、二つのパターンに沿って展開してきた。これに対して、本パネルで主要に取り上げるのは、(3)近年「金融セクター向け直接投資」(BIS)として注目され始めている銀行業多国籍化の第3のパターン＝「多国籍リテール銀行業」(Grubel)に他ならない。それは本国企業の多国籍化とは「独立」(追従も主導もせず)に進展する金融セクター独自の多国籍化である。グローバル化のもとでの途上国金融サービス業の対外開放や、EUなどの地域的経済統合による「金融サービス業の域内市場」の形成が、90年代半以降、中南米・中東欧などの特定地域において、この第3のパターンによる多国籍銀行の全面参入に道を開き、戦後の金融業多国籍化は「新段階」に入った。

本パネルでは、新しい段階に入った金融業多国籍化の現状、原因、そしてそれが国際金融全体に対して持つ種々の含意などについて検討することで、多国籍銀行論の新たな課題に挑戦できればよいと考える。そのために、本研究分野において先駆的な研究を行っている3名のパネリスト(川本明人氏、伊鹿倉正司氏、高安健一氏)をお招きし、次の二つの座標軸に沿う形で報告をお願いした。第1の座標軸は「地域」軸である。3名のパネリストには、それぞれ欧米、中南米と中東欧、アジアにフォーカスいただくことで、金融業の多国籍化が進む主要地域をカバーする。第2の座標軸は「多国籍化パターン」軸(上述の(1)~(3))である。以上により、世界の各主要地域における金融業多国籍化の現状と特質が解明され、またそうした中でアジア展開を進める邦銀にとっての課題が示されればよいと考える。続いて金融当局とアカデミックの立場から、それぞれ内田真人氏と家森信善氏に予定討論をお願いした。それにより「金融セクター向け直接投資」がもたらす種々の規制・監督上の問題点や、多国籍銀行論などへのフィードバックなどについて議論を深めることができればよいと考える。